

近藤芳美賞

(新作十五首)

ひとけなき地球に

森 祐希子

(東京 62歳)



子供のころから、「大自然」や「野生動物」という言葉が好きでした。ところが、半世紀ほど生きてみたら、どちらも危機的な状況になっていました。この現実に対して、専門家として取り組む人や、それを引き継ごうとする若い人たちがいます。では一介の素人には、何ができるのかと考えてしまいます。

地球とその生命体が歩んできた長い時間に思いをはせ、短歌という形を信じ、言葉で自分が感じていることを表現することが、私にできることのひとつかもしれないと思って詠んだのがこの連作です。思いがけなくも名誉ある賞をいただき、驚くとともに感謝しております。

選にあたって

地球環境の問題に深い関心をもつ、スケールの大きな一連です。マイクロプラスチックによる海洋汚染や、地球温暖化による北極海の海水の溶解などをうたいながら、余裕のある歌いぶりです。単に悲観的なのでもなく、「ビニールが時に自分と思われて喰われているとは知らない水母」などニューモアさえ漂うところ、出色です。自分の対策(紙ストロー、マイボトル)をうたうのも律儀。「ひとけなき地球」をむしろ楽園として結論づけて印象的でした。

(岡井 隆)

水をめぐる環境問題を中心にしつつ、損なわれてゆく自然界を見つめている。眼差しは犀利だが、一首目は若山牧水の「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」の情感を踏まえるなど、知と情が見事なバランスを成している。海亀、水母、ホッキョクグマなどの生き物の一つとして「ヒト」であるみずからの存在を捉えているところに説得力を感じた。近藤芳美賞にふさわしい、社会への提言をたずさえた連作である。

(栗木 京子)

地球温暖化とともに、人間の生存を危うくする問題として、海洋汚染が話題になっている。ビニール袋やプラスチックごみの著しい氾濫は、これから対処すべき難題である。つとめて作者が、この大テーマに挑み、応募作のなかできわだっていた。地球を守るといふ問題意識が、かなりの説得力をもっていたことを認めたい。このうちは総論へ走らずに、11首目のような日常における瑣末な抗争を、時間を掛けて主題制作として欲しい。

(篠 弘)

ぼんぼんと海原跳びてゆける白　発泡スチロールかなしからずや

押しやればむにゆりとへこむ海亀の卵は割れず時を待ちおり

水環境保全学者は少し潮に焼けたるような白髪交じりで

千分の一の生存確率の海亀ふわりとビニール呑むな

自然分解され終わるまで数百年かかるらし消えることの難しさ

酸性雨も森からの声も受け入れて静かに揺れる海は昏しも

ビニールが時に自分と思われて喰われているとは知らない水母

年ごとに異常気象とヒトは言いホッキョクグマは飢えて叫^{おら}べり

北極まで海汚されて　さはあれど地球はヒトより長生きかもしれず

私は人間だから人間のもういない地球思えば寂し

紙ストローもてあそびつつまず今の私にできるこのひとしづく

マイボトル職場にたどり着くまでに二度使いたり氷鳴らして

しなやかに四肢振り海のうた風のこえに合わせて踊り続ける

踊りおるこの生き物は私か彼女か彼か太古の宇宙か

ひとけなき地球に獣、魚、鳥、虫、花、満ちて音、音、満ちて

岡井 隆選

選者賞

影をはさむ

岡本 秀美（愛媛）

風入れの一枚一枚繰る指は若葉の影を名簿にはさむ

葱刻みながらその日の朝をおもふ敵機の去りしヒロシマの六日

掘り起こし積み上げられし頭蓋骨眼窩に閃光の記憶の満ちて

織りかけの布を断つごと地球平和監視時計のリセットされる

構造の解説きき入る少女たちリトルボーイの模型を見詰む

赤茶けしざら紙の死亡証明書手書きの文字の「三才、五才」

錆びついてゆがんだ車輪の三輪車 大人になれなかつた伸ちゃん

絶筆の学徒の日記八月の五日ののちの余白褪せたり

「こはさないで」かちやま 楮山ヒロ子の遺稿ありて原爆ドームは保存されたり

すいめん 水面に映るドームへ届くごと澄みたるチャイム八時十五分

被爆図を描く少年語部と向きあひ死体の色をたしかむ

広島に育つた子として原爆の絵を描きたいと直ぐな目差

ヒロシマの核廃絶の署名簿に一つのペンが手渡されてゆく

サンダルに指のかたちの残りをり八月六日の町を踏みしむ

いづこまで続く青さか瘡蓋すら残さぬ空のヒロシマの夏

選評

「影をはさむ」の岡本秀美さんは、現在の問題としてヒロシマを歌っておられます。「織りかけの布を断つごと地球平和監視時計のリセットされる」この事実が、一連をうたう動機だったと思われる。「被爆図を描く少年」の「死体の色をたしかむ」も衝撃的でした。広島平和記念資料館の歌では「ざら紙」「手書き」「余白褪せ」等、具体的な描写が、歌の力です。「ヒロシマの核廃絶の署名簿に一つのペンが手渡されてゆく」の下句に「希望」を荷わせて、まとまりのよい一連になっています。

奨励賞の升本真理子さんは阪神淡路大震災の被災者。東日本大震災の被災地、岩手を訪ねての歌で、東北方言も取り入れ、一連に何でもない（漁師風サラダ）の歌等も混ぜ、技術的にもうまい作者です。「それを抱えるものだけ見うる」「いつ誰がどのように決めるのだろう がんばろう○○を撤去するとき」など、被災者ならではの視点に、印象を受けました。

同じく奨励賞の波多野浩子さんは浪漫的な作風で、詩的な想像力とミドル世代の心情の翳りが渾然とした一連でした。「地球とふミラーボール」や「ガードマンの鼻梁」「はやぶさ2は」に賛成です。「かぐや姫」は素朴過ぎるでしょう。しかし才気のある秀でた作者です。

奨励賞

「ここから」に立つ 升本真理子（兵庫）

はやぶさは全席指定で運びゆく　いくはずの人を　あるはずの場所へ

鰯の無き魚は積まれて売られゆくビジネスホテルは海沿いにあり

神戸からですと応えればまだひとり見づがんねえのと隣席のひと

その言葉の中にはきず痕があるらしい　それを抱えるものだけ見うる

神戸だって十年かかったろ？（いやそんな）海で熟する酒のあるらし

するめいかの塩辛ひとさじ乗せられて漁師風ポテトサラダ華やぐ

新しい道を造りし人々の去りて消えたり大船渡屋台村

四棟のプレハブ庁舎はバス停に傘もささずに待ち続けおろ

「ここから」と「ここまで」がある標識の「ここから」に立つ浸水区域

風花は薄らに消えて消えゆかぬアスベスト散りき街にわたしに

いつ誰がどのように決めるのだろう　がんばろう〇〇を撤去するとき

人よりも先に挨拶交わしつつ人工の浜に集う犬たち

釣り人は等間隔に背を見せて月を待ちおり　もうすぐ満潮

損壊に全・半・一部のあるを知り借家に暮らす二十四年を

東京が沸き立つ二〇二〇年　新庁舎建つ陸前高田に

奨励賞

宙色のリグレット 波多野浩子（東京）

大星雲に昂ぶるわれよ遠足のプラネタリウム東京の宙そら

惑星を12のハウスに書き込んで出生ホロスコープ図を作りし春夜

地球上に生きると決めた夏ありき天体の夢を久しく見ない

涙もろいミドル世代となりにける断じて泣かぬ少女でありしが

朝なさな夫を異界へ送り出すボヘミアンガラスの回転扉

ガードマンの鼻梁うつくし自販機がうっかり隕石こぼす夕暮れ

中秋の名月ほのほの眺めをりかぐや姫にはあらざる私

あくがれは膨らみすぎて燃え尽きぬ二級河川を見つめた青春

破滅から誕生した星しらじらと四千億個のひかりを放つ

蒼穹にわがリグレット投げ上げむ絶対無二の入道雲へ

地球とふミラーボールを乗りこなす道化師みたいに優しくなりたい

追憶の銀杏いちょうはレモン色なして心奥の女男めをむすばれる秋

朝もやのパン屋に香るクローツサンわが靈魂のかたち成しつつ

地球儀は廻り続ける神経のやうな河川を身にめぐらせて

はやぶさ2はきつと鳥瞰てうかんするだらう東京五輪のなごりの地球を

栗木 京子 選

選者賞

職場歳時記

涌井ひろみ（東京）

校内で出会ふ貴き泉なり本見繕ふ司書さんの手

マレットを持つ指先を墨に染め書写の後には少女ら香る

梅雨最中いつき先生蒔かれしは俳句の種と潔さなり

水無月に白き翼がむつくりと中三生の肩甲骨に

二〇人面接終へてたまりくる熱とばさむと裸足で歩く

隣席のランチボックス何よりの職場歳時記枇杷さくらんぼ

高皿の濃き夏終はりいちやうに生徒やさしく棘かくすごと

小春日に定期考査を受けし教室^{へや}ドームの屋根がぴかりと光る

坂の上空どこまでも高き日は龍舞ふ姿見える時あり

白きのど「あした浜辺……」と歌ふ時世界めくれて波の音する

木蓮の蕾にも似た少女らの心かたくて言葉とどかず

目つむれば女子高生のざわめきは椋鳥のこゑ春近き朝

君がのる舟ゆるゆるととほざかるこの世の掟バラストにして

「合格です」報告の声透きとほりクールな委員も春のさへづり

光あび言葉をあびしきよらかな六年の日々歌で送らむ

選評

選者賞「職場歳時記」の涌井ひろみさんは教員であろう。中高一貫校で若者たちと日々接しているようだ。教育現場は困難な局面もあり、一連には「生徒やさしく棘かくすごと」「心かたくて言葉とどかず」などのフレーズも見られるが、全体として作品がみずみずしい季節感に包まれていることに惹かれた。「君がのる舟ゆるゆるととほざかるこの世の掟バラストにして」は巢立ってゆく生徒たちへのあたたかく厳しいエールと言えよう。

奨励賞「小の字」の桃生苑子さんは二歳児と乳飲み子の育児に奮闘している。多忙を極める毎日だと思いが、子と過ごす蜜のような時間への慈しみがあふれている。繊細な観察眼と豊かな一体感が自然なかたちで合致し、読後にのびやかな情感が広がることに注目した。育児は個々の体験を超えた社会全体のテーマでもある。作者にはこれからも子どもたちとの時間を詠み続けていただきたい。

もう一篇の奨励賞は原ナオさんの「龍に逢ふ日は」。龍笛（横笛）を演奏するときめきが、たおやかな身体感覚をともなって詠まれている。清潔な官能性が心に残る。幻想の世界に心を遊ばせる一連だが細部の描写の具体性が臨場感を生み出している。

奨励賞

小の字

桃生 苑子（愛知）

二歳児と乳飲み子寄せて巣ごもりの獣になりぬ台風の夜

耳たぶと乳房小さき手が掴むわれの身体を分け合ひて子ら

花の名を子に言へぬまま通り過ぐ群れ咲いてゐた狐剃刀

マカロニのやうなる指を吾の口に食べて食べてと差し出すことも

胸元で喉をさらしみどりごはこんこん眠る葉影受けつつ

「ノートからはみ出ないで」と言へど子はクレヨン持ちて床に線引く

怖ろしくあらむや子らは母であるだけのわたしに全てを委ね

テナントの空いてしまったスペースを子が駆けまはる笑ひ声あげ

子のために作る話の鬼はみな人傷つけず それでいいのか

生えたての歯でも鋭し授乳する態度が悪いと噛みつかれをり

「叩かない」「突き飛ばさない」吾がけふ子に投げつけし言葉の破片

紫蘇の葉を子に摘ませれば葉脈を祖母の手首と同じだと言ふ

子の汗のにほひと同じ体臭を纏ひて夏の盛りが過ぎる

二人子と作る「小」の字 寝るときがいちばん母の姿なるらむ

やじろべゑ 左右の腕にひとりづつ子を絡ませてしばし揺らるる

奨励賞

龍に逢ふ日は

原

ナオ（東京）

桜さく西本願寺前で選るプラスチックの細き龍笛

ああこれはわたくしの笛ゆび孔の七つの楯円に指の吸ひ付く

新しき笛に井筒と名を付ける自己紹介は春風の中

左手の親指に込もるやや強き力はゆつくりゆつくりほどく

かろやかにプラ管を抱く葉二はふたをかつて吹いてたかもしれぬ息

わが耳の奥のおくから聴こえ来る音を春へと解き放ちたり

全身の息をくまなく出し尽くすのちに生まれるにんげんの音

長くなきことも音色のひとつなり長くなきわが指のしわくちや

龍笛の春の領域 望んではいけない恋をしてゐた君に

わが笛に宿りしは梅の精ならむ新月の夜に匂ふ紅梅

龍笛の教だけ音のあることの甘いみかづき色の呼び声

飼ひ主の顔に似てくる犬のやうわが龍笛はわが声に似る

賀茂川の清き流れを見つつ吹く龍をまるごと洗ふ夏風

香水のごとく音色を身にまどふ龍に逢ふ日は龍笛を吹く

リュックには龍を一匹しのばせていつでも月へ帰れる手筈

選者賞

国境の島

松本千恵乃（福岡）

対馬にて集落の名を尋ねつつ玉調・豆酸とふりがなを打つ

国境の島の風吸う対州馬きれいだろうな肺胞の中

八色をその身にもてる八色鳥生き難い世を楽しく生きよ

防人はツシマヤママネコ見しならん山また山の対馬ゆきつつ

ヤマネコのような人だと言われればめつたに顔を出さぬ人らし

キツキとキタタキの音を聴きわけた先人おもう対馬の森に

どこにいる秋窓螢 心奥の詠み人知らずの歌のごと灯れ

白波の音のまにまに野良猫の声する漁港たそがれてゆく

防人の海を見つめる生活も三年となれば白藍色の海

腰落とし飛びかからんとヤマネコは一日一匹もらうネズミを

手渡しにハツカネズミを与えられツシマヤマネコぐぐつと締めゆく

生きているハツカネズミをもて遊ばず獲物として喰うツシマヤマネコ

防人も登りたりしか金田城その石塁の伽羅色ながめ

陽の当たる蜂胴ごとに翅音す対馬純粹種のニホンミツバチ

渡り鳥の十字路の空に瑠璃色の止まり木架けて虹の神様

選評

松本千恵乃さんの「国境の島」が、対馬に派遣された防人を詠んでいるので、万葉集を久しぶりに開いた。山ばかりで農耕ができない対馬へは、防人の食糧は船で運ばれていたのであろう。巻十六（三八六など）の群作は、「沖つ島 鴨」といふ船の 帰り来ば 也良の崎守 早く告げこそ」をはじめとして、船が嵐で沈んだ悲劇があった。

作者は、丹念に当地の珍しい動植物に着材し、眼を引く一連となっているが、13首目に「金田城」を詠んでいるのであって、対馬に渡った古代人の労苦を思いやった作品が欲しかった。

この十五首という枠組みは、必ずしも大きな主題制作には不向きだろう。その意図ばかりが目立ち、作品として豊かな肉付けが損なわれがちである。やはり一、二のテーマがあったほうがよいと思うが、実生活に即したオリジナルな実情実感を基調にして、さらに詩的感興をとまなう表現がふさわしい。

寄せられる多くの作品に、青春回顧や戦時下の回想がすくなくない。この芳美賞に限らないが、そうした微視的な小世界の歌は避けたい。懐かしい思い出の歌が駄目なのではない。それにまつわる過剰な自己慰安は、けっして文学にならないのではなからうか。

奨励賞

虹

金子 裕子（神奈川県）

新しき地に移りゆく決意する私を主語に生きゆくために
かなかなの声追ひてゆく杉木立うすくれなるの空暮れぬ間に
紺青の平潟湾を沖に見るわが半世はこの地を出でず
むらさきの雲の下なる日常の一日が暮れて吾は今在る
去りゆくと心を決めし部屋うちはくすみて過去の幻映す
A Iよ我らを凌ぐ暁は心優しき隣人であれ
見尽くすといふことあらず蒼天に雲の分布が刻々動く
限りなく死までの時間あるごとくニュース画面に死者の数見る
ネット上飛び交ふことは渦を巻き虚空に淀む幻影を見る
過疎の村遙かに越える人口を擁し時つタワーマンション
サフィニアの花に寄り来る黒蝶は時たたみつついづこかへ消ゆ
読まぬまま書架に積まれしプルーストセピアにくすむ時を被りて
水面に編まれほぐるる陽の光運河の岸に永く見て佇つ
風に乗る高き鳶にわが上に一度限りの一秒止まる
驟雨すぎ弧を描く虹を望むときある完了の想ひが兆す

奨励賞

やがて来る

嶋田 恵一（東京）

青葉木菟の啼く声怖しといふ従妹その腕つかみ神社を抜ける
十五キロのビールサーバー背負ひたるドームの売り子階段のぼる
トランクの手箱開ければ姉宛の恋文あまた五十音順
かたつむり這ひたる跡の銀色のぬめり光るよフロントグラス
青大将の頭を火箸に押へつけ袋に入れば血を吐きにけり
ドローンを飛ばして肥料散布する百ヘクタールの唐黍畑
打ち寄せし若布を干せる匂ひして利尻の浜の夏ははじまる
大雨の去りたる街にゴム草履浮きつ沈みつ舗道を流る
海岸に藁を燃やして魂送り酒一升を海に撒きたり
秋雨の降りやまぬ昼立つたまま馬は眠りて草原の夢
台風に乱れて倒るる萩の花ビニール紐に括りて立たす
連弾の姉妹の指が宙はしる秋の月夜のピアノ演奏
並木道われを付けくる靴音のかつかつとして兵のごとくに
蝦夷鹿に大粒の雨あたるたび振れる耳より銀箔の飛ぶ
しぐるればやがて降る雪やがて来るわが死のことは遠き潮騒

やさしい楽章

住吉和歌子（北海道）

金星も微笑む夕べ誠実な音色の響く君のシューマン
音叉もて合わせるAもわたくしも君へ傾く半音ずれて
鍵盤が湯気を出すほど弾き込めば暗譜していた「喜びの鳥」
あいまいなまましておくやさしさは残酷君は気づかないけど
学生の面影はもう消えている会うたび遠くなる君の声
向日葵の色したバッグを選ぶ朝味方をひとり増やしたように
音もなくかき氷の山崩れ落ち終楽章の始まり思う
旋律は逃げてゆくから追いつけぬカノンのようなあなたと私

里のしきたり

遠山 勝雄（宮城）

きさらぎの夜更けの雨はいつかしら雪となりたり枇杷の花の上
古き門木の間に見ゆるこの朝けうぐひすは病む妻をいやせり
彼岸待ち野焼きの畑をうなひあぐ芽だしを経たるじやがいも植ゑんと
春たちて青龍山にはたた神ひとつとどろき海に散りゆく
どくだみの群れ咲きにはふ日吉社に詣でるわれをすずめ見守る
冷や奴青しそそへて冷酒四合病ひいえゆく妻とわけあふ
盃蘭盆の施餓鬼会をへて菩提寺にわれをねがひうつ青き古鐘
正宗の菊月にみる伊達すがた現の世事われをいましむ

吉野ヶ里遺跡

氷室マユミ（宮城）

二十年経てふたび訪ひし吉野ヶ里いつしか台地は公園となる
園内に循環バスの通る見てにはかに疲るるわれら乗り込む
高樓にのぼりて周りを見はるかす心はまさに弥生の人ぞ
環濠のうちに環濠のなほありて森のなかなる要塞と化す
祭殿とおぼしき大き建物にほのかにうかぶ卑弥呼の治世
青き空ひろびろとせる縄文の環状列石われになつかし
ハンゲルの案内板の珍しと海の向かうを遠くながめつ
大和よりはるかに近き半島に日は沈みゆく暮らしをのせて

ふるさとの空

鈴木 仁（秋田）

鎮魂の植樹のつづく海岸にあがるヒバリの早春の歌
伝えたい言葉も壁に遮られ海の見えない震災の浜
野馬追の行列の来る道清め燕と交す朝のあいさつ
雨あがる風にはまなす色映えて相馬の海も船の戻り来
三月の雨に濡れいる観音は津波に消えし海の声聞く
あたたかな春の光の花束は震災記す供養碑に置く
避難終え再開なりし園庭にタンポポほどの子の声咲けり
この春の引越しの荷に持ち来しは絵画の中のふるさとの空

※十五首のうち、八首を抄出しました
都道府県別名前五十音順に掲載してあります。

やはり幻想

青木 成徳（福島）

原発の建屋はいつの日になればとり壊されてもとの浜辺に
亡くなりし人に送らむ鎮魂の歌声とどけ日本一の歌
まだ残る仮設住宅いつの日にとり壊されるや福島市街地
後世に語りつぐべきフクシマの苛酷な生活被災者の日々
被災者の「心の復興」目に見えず行きつ戻りつ進まざるもの
「フクシマの復興なくして」語るとも空疎な言葉に心動かず
取り出して「ヒロシマノート」を読みかえす長崎・静岡そしてフクシマ
フクシマの事故が暴いた原子力「平和利用」はやはり幻想

風のかたち

染宮 千美（栃木）

茹で上げし青菜するどく香りたつ夕餉の膳に春のにぎわい
校庭で風のかたちを確かめてきみと並んでブランコ漕いだ
少しづつ記憶が薄れゆく義母と桜みあげる流れ降る春
いまだまだ汚染度高し故郷にだれにも見られぬ桜は咲きて
前歯まだ生え揃わざり幼子のママ呼ぶ声は春のフルート
静かなりタバコ煙らす夫がいるそりそりと夕雲流る
腕時計今朝は外してコーヒーをゆったり啜るリビングに光
散歩道黄色の花が夏告げる香るあなたの名前おしえて

掌の熱

田名網順子（栃木）

同じ赤着てゐるのにね玄関先紅葉葉は鮮やかに立つ
何をお探しですかスマホに聞かれうっかりと愛と答へたり還暦のわれ
早く走るための蹄は退化して吾は足指に色を付けたり
吾の持つ温度しめり気より高き今日の外気を掻くやうに行く
老いと死を父母に教はり吾もまた初めの一歩老いを始める
老人となるを思はざる若き日の吾の傲慢を映せ鏡よ
負けたくない何にと問へば握りたる拳の中に住む熱きもの
交尾しつつ花を食ひをるカナブンを仇のやうに払ひ落としぬ

眠る化石

岡田 美幸（埼玉）

語るべき言葉は無くてもまだ白いノートをめくる風速がある
青空に試験放送した途端名付けた雲の形が変わる
アルピノのザトウクジラのようなだった光が焼いたYシャツの背は
白亜紀の朝の匂いは現代と違ったでしょう眠る化石よ
たこ型のすべり台なら分かるかも海の記憶を隠していると
食べかけのアイスクリームが溶けなくてこれは夢だと気付いてしまふ
世の中に未だ興味は尽きないが歩き疲れて眠る日もある
生まれつき自由な鳥は行き先を他に尋ねることはしないか

調理場

粕谷 鱧水（千葉）

庖丁の音も料理と軽やかに朝の板場に胡瓜を刻む
今日もまた勝つカレーをと入り来し受験の学生が笑みつつ座る
漁師たりし父の好みしサンガ焼き鱈の味噌和へに紫蘇葉が匂ふ
酢味噌和へ好みし父を偲びつつ翻車魚の肝を丹念に攪る
魚屋の勧むるイカの塩辛を味見を餌にまた買はさるる
この年は大漁らしも真鱈の塩焼きを食ふ皿をよごして
深海の闇に育ちし鮫鱈か吊し切りゆく先づ肝を抜き
五十年商ひ来たりし自信をと妻に言はれぬさうかも知れぬ

札沼線

鈴木ひろ子（千葉）

廃線のレール迪れば草木のなかに隠るる増子駅にて
鹿のため運休ありし富良野線ホームに学生かたまりて待つ
美馬牛のホームに立てば新緑の映る列車が遠ざかりゆく
来年の五月に廃線決まりある札沼線の席ほぼ埋まる
この景色廃線ののちは無くなると思ひ見てをり窓辺に立ちて
枕木とガラスと同じさび色のレールが伸ぶる新緑のなか
一日に一度の発車幼らが新十津川の駅に見送る
新緑の丘のむかうに暑寒別岳くきやかに見ゆ橋をあゆめば

追憶のダイビング・ログ

広里ふかさ（東京）

青春に七回行った宮古島戻れぬ碧さをテレビが映す
ゆつくりと白い珊瑚の白い砂小魚が背に陽射しを受ける
赤さえも紫色に翳る海珊瑚の生える岩場を越ゆる
あたたかな海に体を支えられ無重力でのバランスを知る
クマノミが小さい口を精一杯こちらへ向けてなわばり守る
乾くこと濡れることとの不快さは魚と人では逆かも知れぬ
透きとおる水面見上げ呼吸する泡のかたちが生きてる証
冬の日も誰もがそつと夢見てる心の中に終りのない夏

伊江島のカジュマル

江里口紀子（東京）

本部長より九キロ離るる海原に烏帽子被くこと「伊江島城山」
美ら海を日に四便の船でゆく摩周湖ほどの戦跡の島
砲弾に撃たれゆがみし城山の齋き拝所島人守れり
終戦を知らずに二年隠れいし兵を護りき古木カジュマル
剥き出しの遺品や武器の生々し「ヌチドウタカラの家」はせつなく
泣き声は利敵行為と刺殺されし赤子の着衣が血染めのままに
とつぜん米軍ヘリの飛びたてり甘蔗畑に沿う鉄条網の内より
底ぬけの空の明るさ何処かで今日も戦火の犠牲者のあり

組曲ごはんもりもり

田島 千代（東京）

甘辛系肉のおかず三兄弟ごはんもりもり楽しき夕餉

稲刈りも田植えも知らぬ母わが「米」の由来を子らに説きたり

米五キロ牛乳にんじん豚ロース背負いて歩むシエルパのように

豊葦原瑞穂の国のうつくしさ 空映す田、稲穂揺るる田

ユニセフのミルクにいのちをつなぐ子を抱く母若しひしと子を抱く

しあわせな記憶とともにあるべしとテーブル囲み食前の祈り

「お母さんおいしいね」と飢えながら兵士言いしかいまわのきわに

がしがしと米研ぎおにぎり作るわが手はありふれたおかあさんの手

園児とともに

澤田加津子（東京）

指先が地面につくほどお辞儀する園児らの「お早うございます」

まつすぐに我をめざして駆けてくる幼子達をしかと抱きしむ

きざみ食・アレルギー食・離乳食こまごまつくる園児の給食

わが指をつかみしままに眠りゆく二歳のけん君まつ毛濡れをり

児のやうに腹の底から全力で泣いてみたいと思ふときあり

シデの木につきたる脱け殻五つ六つちい君指さし「蟬のなる木だ」

事務日誌・保育日報書き終へてつきあぐるこのむなしさは何

保育所に泣く子、笑ふ子、戸惑ふ子 みんな元気で大きくなあれ

「サクラ・さくら・桜」―新宿御苑にて 田上 脩（東京）

「咲いたヨ！」と枯木に花の咲く如く十月桜ポツポツと咲く

大寒に染井吉野の樹勢診る空洞有りや枝枯れ無きや

啓蟄に五分に咲きたる可憐なるオカメ桜にカメラ群がる

昼寝する亀の背中に舞い落つる修善寺桜の花弁優し

立枯れの染井吉野は伐られたり、その年輪に明治を知るか

雨上がりの一葉、関山、普賢象咲きて華やぐ「桜見る会」

玉藻池の水面に落つる花弁を追い掛け追い掛け戯るる鯉

桜守開花調査に今朝もまた花弁浴びて御苑を駈ける

キラキラ光る

林屋西一郎（東京）

リクナビの働く人のインタビュー 同じ世界が眩しすぎる

キラキラの希望だとか夢だとか 熱い言葉に溺れ死にそう

大学でちゃんと学んだことなんてヤフオクならば1円ぐらい

それなりの大学だつて出てるのに 乗り間違えたキャリア特急

1Kの家賃のために働いて手元に残るコンビニ袋

真夜中のトラブルメール見ないふり 部屋に漏れだすチェレンコフ光

朝5時の始発電車に乗り込んで「地上の星」を窓から探す

目指してた輝きとは違うけど 残業明けの朝日がしみる

父母の満州

舛山 誠一（東京）

無敵とう関東軍に棄民されソ連軍越境絶望の朝明
もろともにここで死なんという母に生きてこの子に一日たりとも
乳飲み子は母に抱かれ謀略の徒花の都逃れ去りたり
妻と子を闇に放ちて新京の虜囚の父の無頼の一年
謄写紙に一画一画刻みいし教師の父の丸き背中よ
父母の夢のかけらの眠る町訪わんと思ひて早や古希過ぎぬ
果てしなくトウモロコシ畑広がれり父母の見し高粱畑かく
数々の歴史建築碑に刻む「偽満」の文字の重たかりけり

秋霖

松下 照子（東京）

胸反らし呼吸止まりし犬の背に蟻這いのぼる梅雨明けの庭
中庭の空いたままなる蟬の穴息絶えし犬への挽歌奏でる
老い初める夫婦のドアは軋みゆく無言の夕餉犬病みてより
寝たきりの身体を拭いて目やに取りわたしは犬の母親になつた
青葉盛る柿の下まで犬は這い鳥にならむとしたのだらうか
もういいよ息絶える日まで尾を振りし犬の律儀に涙止まらず
死の重み振りはらわんと見上ぐる空犬のかたちの雲の群ゆく
苦しさに庭につけたる爪のあと秋霖洗う完膚無きまで

さるすべり

西村美智子（神奈川県）

円陣の真中まなかに若樹のごとく立ち先生告げき赤紙とどくと
丸刈りのすがしき挙手の礼に降るさるすべり美し せんせい万歳
さるすべりここにも咲くと軍事便師の消息はそれで絶えたり
泣き明かしし八歳の夏枕辺にアンデルセンと未明座りき
かの夏ゆ八十年過ぎ米寿なり朝な朝なに朝顔は瑠璃
春の花なべて極まり車椅子万花かがよう向日葵にあう
爆撃の夢に覚めたる夜半の窓吠えかかりおり巨大台風
特攻でありし白寿の人去ればデイケアに戦争の話絶えたり

叶わぬ夢

川村 咲良（長野）

わが孫も待機児童となりてゐる育休明けに不安な娘
育休中、入れたる園を探し娘この申請結果は「不合格」なり
働くにバックに母がいなければ子育て重い日本の保育
自転車の前と後ろとママ抱っこ、子育て中の勝負は時間
自転車をパパが運転する朝は前のおのこは長パンかじり
育休後は仕事が溜まり午前様、男社会の厳しさ感じ
職場から「仕事が回らぬ、取らないで」息子が語る育休取得
「一・八の出生率を目指します」公約しても叶わぬ夢に

サルビア

高田 理久（福井）

雪生^あれて雪のうるはし風生れて風のさやけし いざ生きゆかむ
十年來の「不定愁訴」にやや重き「病名」がつく褒美のごとく
大股に子が乗る（特急サンダーバード）巢立ちの春の風とならむよ
をさな児のあまき唾液のほひ秘め校庭に今もあの日のサルビア
わが生を繋ぎ呉れたる子らそだち夏服の似合ふ大人となりぬ
幸せは後付けでいい 梔子のあかき実ともる小径をぬける
筋雲の潔きかな救済を求めぬひとの生きざまの如
雲生れて雲のおだしき波生れて波のたのしき なほ生きゆかむ

夏のみづ

朝羽 いむ（愛知）

地上にはいのちの数だけ時があり驟雨に蟬の騒ぐまひるま
雨に濡れアスファルトのみち幽かなり焦がしたやうな匂ひ立ち籠め
葡萄棚ひたすら翳るくらがりにもれなくぶだうはみづをたくはふ
わたくしは常温ぢやない水道の水もて生きる水族を飼ふ
夏のみづ冬のみづにも慣れてゆく鱗がどんだん剥がれていくわ
生涯にたつた一度のまぼろしめくまばたきをして魚は死にたり
水槽につひにひとりの魚となり喪に服すがに水底の息
野菜室のつめたき闇を地球とし咲いてしまつたクレソンの花

跪く

川添一二三（三重）

裸木のデイゴの樹液うごくとき礎^{いし}のこゑを聴かむとぞ来ぬ
二十余万人の刻名のなかに「藤田徹彌」のみ名見出してただ跪く
校庭にながく拳手の礼して征きましきありありと十二のときの記憶に
未帰還と長く出勤簿に記されぬし先生を教壇に終ぞ見ざりき
うしろよりわが筆を持ち補筆下さりし先生の吐く息吸ふ息忘れず
遠く来て礎に白菊捧げたり沖繩の海風吹きつくるなか
あと十日生きて在さば沖繩の戦火終息してゐしものを
島の容変るまで撃ち砕かれき辺野古の龍神いま何処在ますか

大地の裂けめ―北の族から

俣野 右内（京都）

「民族のことで喧嘩したかった」萱野茂をコタンに偲ぶ
あつれきは今はいかほどかつて見し映画彷彿「コタンの口笛」
希望持ち原野開拓入植も夢のあととなる廃屋いくつ
夏涼しあこがれの地に来しもの何も見えざる摩周湖は霧
今なおも「内地」のことは生きており北の大地に息づく歴史
サイロ消え牧草ロール転がれる北の大地の短き夏に
生れし島そこに住まうは天国に住むより難しと「国後」の見ゆ
眼前の島と史実に向きあえる人の思いの黒き海峡

「南三陸日記」を読んで

前島 一博（兵庫）

今もなほ行方不明の者たちはこの美しき海のどこかに

家も無事家族も無事ですみません海辺の町に降る細き雨

「生きようよ」とお腹を蹴る子に励まされ心を決めた蟬の鳴く日に

大丈夫と言ったそばから思ひ出す夫の言葉と最後のやりとり

「ありがとう生まれさせてくれてありがとう」私をしつと見つめる命

パパのため手持ち花火をぶんぶんと回すこの火がパパの送り火

打ち込めることの幸せ噛みしめて白球たたく金属バット

生徒らの創作ダンスの背中には「I love ミナミサンリクチョウ！」

備後おもて

横川美重子（広島）

蘭草苗植ゑむと小分けにする睦月かじかむ指に息はきながら

一列になりて蘭草を植ゑつつもバイト学生は見やう見まねで

やうやくに終へて安堵のティータイム学生さん等はカステラが好き

そろそろと七月半ば刈り取りへ水分補給に気をつけながら

備後おもてを継ぎきし老いの限界をねぎらはれをり知事の視察に

御用達なる備後おもてのよき香りまとひて夫と夜半まで織りぬ

継ぐ子だにあらぬ生業と嘆きつつ止めると決めて先祖へ詫ぶる

令和へとさ迷ふ日本を若人に託す朝を希望と呼ばむ

宇品線

和田 紀元（広島）

広島駅南のホームは港行き大陸への兵乗せしところと

線路あといまは直ぐなる道となり薄紅の立ち葵一列に咲く

立ち葵訪ね訪ねしことのありあれば遥かとなりし友と二人で

何箇所か小公園残るのみ錆びし短きレールに動輪

開発は軍事機密とし知らされず突如歴史に登場した線

終点の跡は海際その昔船ら着き発ちし岸壁のあり

海茫茫かたはら薄の群れそよぎ遥かなるときいまを行き来す

終点の駅あと近藤先生の歌碑ありて海の方引き古りぬ

盆地に生きて

阿部 愛子（山口）

燃え果てん命いとおし我等をつつむ山は日に日に色づきてゆく

わが余生優しき色に染めゆかん孫八人と会いては語る

一面に桑の若芽はひろがりて日毎に明るし黄緑の畑

夕闇の迫る山里満開の梅のひとむら暮れ残りいる

体力の弱りし今年も一歩一歩肥料撒きゆく田植に向けて

広島より帰りて孫は手伝えり晴天土日で稲刈り終える

転作の大豆に追肥やりゆけば薄紫の花が咲きおり

明日もまた励まむと思ふ温かき湯に手のあれをいたわりおりて

秋の香り

藤原 靖子（高知）

その奥に何があるのか知りたくて仰ぎ見る白き月の光を
夕空にすうつと溶けていくような郵便ポストの静かなる赤
茄子の煮付けにたかなし新高梨の並び来て厨に秋の香りは速ぬ
四万十の風の香りを感じつつ届きし栗を祖母に供えぬ
遠き日に一緒に歩きし銀杏並木を過ぎれば青春の香は漂う
いつからか三センチ吾より背の低くなりし母との秋のひとつとき
過ぎてゆく夏惜しみつつダージリンティーに浮かべぬ秋の破片かけらを
秋風の囁き三つ四つ聞こえたり夏の終わりの祭りの後に

海につながる

小林 賢太（福岡）

道の辺に石楠花は散る まがなしく朝のひかりがふりそそぐから
君んちで洗ったシャツから匂ひ立つ時折ふいに君の香りは
空中を飛び交ふ会話呼び出し音ぎゆるりんぎゆるりん眼窩を抉る
「職人とか向いてますね」と医者と言ふ なり方とかは教へてくれない
かなしみは夜の湯船にとかしゆくすべての川は海につながる
死ぬことはかなしくないけど惜しいつて教へてくれた君の口笛
新しきシャツにアイロンかけてゆく今日をわたしのものとするため
夏草の野辺を焦がれる荒れ馬は木槿の中に眠らせておく

レジリエンス

堺 多鶴（福岡）

燃えながら尽きる落暉の海に向くレジリエンスをもつと下さい
裸木のメタセコイアようつせみの命燃やしあなたであった
後背の似てゐる人に追ひつきてまた雑踏の街にまぎるる
地下街を人の流れに埋もれゆく群れを逸れぬ羊のやうに
キッチンの窓辺に五年のアレカ椰子あれから何も変はつてゐない
ひぐらしを聞かざるままに白露なりひぐらしの声はあなたであつた
たそがれの渚を歩むやはらかな砂のしめりに心慰はせ
ぬばたまの夜は明け初めて天空に灯ともしのやうなだいだいの月

モラヴィアの風

重松美智加（福岡）

三学期の始まる朝の窓のそと空気持ち上げ飛ぶ鷺が見ゆ
貯水率十一パーセントと映し出すダム湖底に川は流れる
万札で支払いても憚らぬセルフレジにてお茶ひとつ買う
アイドルを売り出すような店先の青みを帯びるバナナの特売
アガパンサスみたいに揺れて佐野君が居眠りしそう午後の教室
あるときはモラヴィアの風 青年へなりてゆく子の声は遙けし
自転車売り場に並び漕ぐをまだ知らぬペダルは前かごの中
いつも買う詰め替えよりも本体の方が安くて負けそうになる

古き館のひな祭り

岩城恵美子（熊本）

肥後富士のすその拓地ひな館十五回目のひな祭り展
鋸で切りたる桃の太枝を甕に投げ入れひな客迎う
赤子抱く如く寝かせし麴から仕込みし白酒振る舞われゆく
手作りの味と香りの白酒に接待の間は笑顔の絶えず
表情の難しきひなを見つめれば語り始むる口元優し
オカリナに合わせて熟女と子等歌う館膨らむひなの祭りは
思い思いに作りし俳句短冊に記して頂くひなのみやげに
枝の蓄全てを咲かせ桃の花ひな片づける部屋に散らばる

俳優

星野 一樺（熊本）

指先を見つめる視線柔らかに悲しいことに慣れた眼をする
台本を読んでいるうちに台本が僕の一部に棲みついでいく
いつだって役に染まっていたいからオフの時間は白黒の服
舞台から落ちるこわさと客席が笑わぬこわさいつでもこわい
ロケ弁の冷えたご飯をかきこんで奪われていく僕の体温
夕空のこの紫を撮りたくて二分のシーンに六時間待つ
ミリ単位視線動かす集中力二人の影の並ぶベンチで
走る走る緑の草原海岸をカットの声のその一瞬まで

ハバナの風

松尾 光浩（熊本）

よく笑ふ現地ガイドは左利き飛行機雲の伸びてゆく空
赤き屋根、緑の車体、青き帽、原色だけの街の息衝き
街角に手打ちドラムとギターの音観光客はシャッターを切る
静寂がヨット・ハーバー包むころハバナの風に揺る椰子の葉
喧騒もスペイン語からなつてをりボレロを踊る少女の瞳
朝焼けがカリブの海を染め上ぐるホテルの部屋にラム酒の余香
「私はハバナ一の美女」果物と野菜売り場の老店主かな
銀色の雨に打たるる歩道橋クルーズ船の汽笛は響く

世果報の種

仲程喜美枝（沖縄）

戦跡に那覇新都心の街の生れいのちの花咲く高層ビルの森
黒南風の樹々の耳ゆらす礎の辺戦跡の語りだすあの夏の惨
火を噴く銃・飛び散る血肉・燃ゆる家沖縄戦の真つ赤な恐怖
傷だらけのジュゴン死す朝「基地反対」辺野古に刻む碧き遺言
ハンストの若者の意志は鳥照らす光となりて希望をともし
心から想ひ直流の指先が未来を決める丸ひとつ書く
新基地反対七十一％の民意なり「埋めたてやめよ」ジュゴンらの叫び
心ひとつに世果報の種まく基地の島東雲色の花咲く未来

イリオモテヤマネコの棲む故里 宮城 範子（沖繩）

イリオモテヤマネコの棲む故里は島の殆どジャングル占める

ジャングルの奥地に生える巨木には表札のごとナンバー記さる

海沿ひの道路に餌を求めきて輪禍に遭へるヤマネコ哀し

暗闇に紛れ夜な夜なヤマネコは鶏襲ふ疾風のごとく

裏山は戦後復興の名目で禿山と化す悔しさ秘めて

禿山に切り株数多居座りて涙のごとく松脂垂らす

切り株を削り松明灯し行く潮引くリーフ大漁はうれし

ヤマネコは西へ西へと移り来て居心地よきか裏山に棲む